

寺尾先生のこと

柴 田 隆

いま改めて、寺尾先生とのかかわりを思い出してみると、35年間、お互いの人生の半分くらいと、専修大学140年の歴史の四分の一と一緒に歩んできたわけですが、何から書き始めたものか、先生にはこれからもまだまだご指導いただきたいと思い、またご鞭撻いただくことになるでしょうが、寺尾先生がご専門とするオーストリア文学、いやドイツ語演劇については、私自身はあまり嗜みがなく、先生のお仕事の幅広さや、その中での先鋭な深い論考について語るができないのは、私自身の不徳の致すところであり、先生には大変申し訳ないという思いでいっぱいです。

しかし、専門の学科ないし学部を持たない教員が、それぞれ自分の専門とはかかわりのない学部に配置され、日常的に接することもなく、いわば「たこつぼ」に入り込んでしまい、隣接領域に触れることで得られる知見、洞察から遠ざけられるということは、本学に限らず、多くの大学で見られることです。幸い本学では2020年、国際コミュニケーション学部が設立されたことで、「教養課程委員長」をお勤めの頃から、目指していたものが、最後の年とはいえ、ある程度実現し、寺尾先生もお喜びなのではないかと思えます。残念なのは、このコロナ禍で、無駄とも思えるが、実は重要な教員間の交流や、目的を定めない自由な議論などの機会が失われていることを、一番残念に思っているのは寺尾先生なのではないでしょうか。

さて そのような学部横断的“異文化交流”？異業種交流？専門を異にするものが、自由に議論し、交流する機会を提供していたのが教員組合で（労働組合本来の目的とは言えませんが）、寺尾先生は、本学に勤務して5年も

経たない時期に、教員組合の書記長を務めています。私自身も執行委員として、側で支えたつもりですが、まだ専修大学そのものや、大学の組織なども、よく知らないうちに、大役を果たすのは大変だったでしょう。しかし一見、剽軽な外見に反し、骨太で、筋の通った論理立てと、それを支える説得力には目を見張るものがあり、組合内部だけでなく、交渉の相手方にも、その存在を広く知らしめたものと思います。多分、そういう仕事の中で、専修大学のことを良く知ることでもでき、その後の教養委員長や、LL 研究室長のお仕事に、その知識、人脈を役立てられたのではないかと勝手に推察しております。執行委員の仕事と共にする中で、同じドイツ語教員であっても、専門も背景も違うので、知らなかったことをお互いを知ることができ、70年代に学生運動に少しでも触れたことがあるものならわかる、義理人情とマルクス主義？という言いすぎか、義理人情とリベラリズムが微妙に混じり合い、その一方でとてもナイーブなところもある、魅力的なお人柄に親しく触れることができたことは、望外の喜びでした。ちなみに定年の最後の年まで、組合の執行委員をお引き受けいただき、最後まで重要なご提言をいただけるのは嬉しいとともに、後進のふがいなさを、ただただお詫びするばかりです。

公式の LL 室長としてのお仕事については、どこかに掲載されるでしょうから、他に寺尾先生とご一緒した仕事というと、国際交流関係の仕事がありますが、ハレ大学、ライブツィヒ大学との交流にも大きな役割を果たされ、多くの留学生をドイツに送り出しました。また留学生の送り出しだけでなく、提携校から来る留学生の、公式ではない歓迎行事の企画など、様々なアイデアを思いつき、実行していく様は、目を見張るものがあり、陰ながら支えるだけで精いっぱいでした。校務の話ばかりでしたが、教育者としての寺尾先生は、毎回の単語テストの実施や、中間テストで成績の悪い学生は、昼休みに研究室に呼んで、再テスト、再々テストをさせていたことが印象に残っています。考えてみると、今、オンライン授業でやっていることを、前々から実践なさっていたのでしょう。もっともコンピュータ関係は、あまり強くは

なく、ネットワーク設定や、ドイツ、オーストリアのテレビで放映される演劇関係の番組の録画、ダウンロードなどは、仕事の上で、私がお手伝いできた数少ないチャンスでしたが。

ひとつだけ、個人的な思いですが、寺尾先生が赴任された最初の年に、教員室のソファで雑談をしていた時、先生が私と同じ中学校で、しかも一年先輩であることが発覚しました。別に、顔見知りというわけではないのですが、共通の知人もいることがわかり、ここで寺尾先生と私の関係が固定されてしまいました。そのことで、先生の態度が変わったとかいうのではなく、むしろこちらの方が、何かにつけて寺尾さんを前に立てて、先輩として、弾除け？あるいは恫喝役？として利用してきたことは否めません。寺尾先生も、別に嫌がることもなく、包容力を持ってその役を引き受けてくださいました。ありがとうございました、大変申し訳ない！最後に陳謝と感謝の念を持って。